

平成30年度第4回秦野市行財政調査会（行財政最適化支援専門部会）会議概要

1 開催日時	平成30年11月19日(月) 午後2時00分から午後4時34分まで	
2 開催場所	秦野市役所本庁舎5階 5A会議室	
3 出席者	委 員	坂野部会長、高井部会長職務代理者、石塚委員、大屋委員、田村委員
	関係課等職員	企画課担当
	事務局	行政経営課長、同課課長代理、同課担当3名
4 議題	(1) 平成30年度行財政最適化支援報告書（案）について (2) その他	
5 配付資料	次第 資料 平成30年度行財政最適化支援報告書（案）	

6 会議概要（要点筆記）

【行政経営課長】本日は御多用のところ御出席いただきありがとうございます。部会長から御連絡があり、所用により遅れるとのことでしたので、規則第5条第5項の規定により部会長職務代理者に進行をお願いしたいと思います。

本日は、委員の皆様からいただいた御意見を基にまとめました報告書（案）について、御協議いただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

開会前でございますが、本日使用させていただきます資料の確認をさせていただきます。

—資料の確認—

それでは、部会長職務代理者に御挨拶いただき、進行をお任せしたいと思います。引き続き進行をお願いします。

【部会長職務代理者】それでは御指名ですので代行させていただきます。よろしくお願ひいたします。本年度で2年という任期が終わりますが、本日は事務局が示してくださいました報告書（案）について議論いただく予定です。

議事に移る前に、本日の会議録の署名委員ですが、規定により部会長と部会長が指名した委員1名となっております。名簿順にお願いしたいと考えておりますので、今回は田村委員にお願いします。

それでは、議事に移ります。まず、議事(1)「平成30年度行財政最適化支援報告書（案）について」、事務局から説明をお願いします。

議事(1) 平成30年度行財政最適化支援報告書（案）について

【事務局】—資料に基づき説明—

補足ですが、この報告書はこれまでの会議の中でいただいた御意見をまとめたものと、御提出いただいた委員意見とを寄せ集めたものです。本日の会議及び次回会議を通じて、最終的な報告書案としてまとめていきたいと考えています。お手元の資料は素案という形なので、御目通しいただいた上でこういうアプローチもあるのではないか、あるいは、こういう意見も盛り込んだほうがいいのではないかといったように御意見をいただければと思います。感想でも結構ですので、本日は最初のほうからできるだけ御意見をいただき、次回会議において最終確認の上で報告書として取りまとめていきたいと思います。本日の会議では、思いついた限りで結構ですので、いろいろな意見をいただき、次回会議でそれを盛り込んだ形で最終案をお示ししたいと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。項目ごとに大まかに区切って、御意見をいただけますでしょうか。

【部会長職務代理者】それでは、どういう角度からでも構いませんので、御意見をお願いいたします。まず、1ページ目にある行財政最適化支援について、何かございますか。

【委員】その前の部分に、「施策の最適化に当たって」という項目があります。下から2段落目にある「W I N－W I Nの関係性」という表現に違和感があります。企業等の取引関係の中で、どちらかが利益を得てどちらかが利益を得られないといった関係においては、双方が利益を得るという意味ではW I N－W I Nでしょうが、大学と市との関係ではあまり適切ではないと直感的に思いました。

【事務局】東海大学側の意見を聞いた際、今までの関係性の中では少し市の都合を押し付けていたようにも感じられました。そこで、大学側の学生のメリットなども生かした事業展開に配慮するようイメージとして捉えています。報告書には他にこうした表現は出ませんが、少し行き過ぎた表現にも受け止められますので、改めます。

【委員】最後の段落にある「競争力の強化を目指す大学」という表現についてです。大学間の競争という観点からは、受験生がたくさん集まらなくてはいけないということはあると思います。しかし、大学の目指すところは競争力ではなく教育や研究ですので、直接的に「競争力の強化を目指す大学」とするには少し違和感があります。

【事務局】大学は企業とは異なり、本来は教育研究機関として学生を育てる場ですので、自治体もそうですが、そういった中で取組んでいくというお話ですね。分かりました。

【委員】2ページ目の第一段落に、「人的・知的資産である大学」とありますが、大学そのものは資産ではありません。「人的・知的資産を有する大学」に改めてはどうでしょうか。

【部会長職務代理者】いま2ページの部分について御意見をいただきましたが、「II 本年度の行財政最適化支援」のところで御意見はございますか。

一点確認ですが、私が出した意見として、ネットワーク多摩という公益財団法人について言及しました。その中で採り上げた第5次多摩市総合計画における「大学との連携」では、次のような表現になっていました。項目としては「C 1-1-2 大学や企業等と連携したまちづくりの推進」とあり、内容は「地域の一員である大学や企業等と連携したまちづくりを推進し、大学や企業等の知識や人的資源を活かしたまちづくりを推進します。」とされています。2ページの下から3段落目に総合計画について触れられていますが、具体的にはどのように記載されているのでしょうか。多摩市では大学と企業を分けず、並列の書き方で一緒に取り込んでいましたので、意見を書きながら秦野市の総合計画はどうなっていたのかなと思いました。

【事務局】報告書の中に、秦野市総合計画の抜粋を入れるよう検討しています。

【部会長職務代理者】先程お話にあったように、大学は営利を目的とする企業ではありません。地元の企業と自治体との関係とは違うお付き合いの仕方なのか、あるいは、大学も法人という意味では同じなわけですから、営利を目的としようがしまいが一緒の扱いをするというのがネットワーク多摩の考え方だと思うのですが、それと同じように並列の扱いとするのか。そのところはどうなのでしょうか。

【委員】ネットワーク多摩は、企業も参画するネットワークでしょうか。

【部会長職務代理者】そうだと思います。公益財団法人であり、メンバーには企業も含まれています。

【事務局】ネットワーク多摩は、大学の地域連携の波の中で、当初は連絡会のようなところから始まったのかもしれません。もともと八王子市は大学が集まった学生の街ですので、地域連携としての一歩進んだ取組がなされています。発展的なモデルケースとして、とてもよいところだと思います。ただ、秦野市の場合にはあまり大学がありませんので、東海大学を中心として近隣市と連携した姿を目指していくことになると思います。こうした広域連携については、このあとに記述されています。近隣では、平塚市域に神奈川大学や小田原市の関東学院大学がありますが、いずれも移転してしまう予定です。多摩地域でも、同様に少なからず都心への移転リスクを抱えているのかもしれません。秦野市としては、なるべく東海大学と地域を密着させて、都会に移転せずとも十分ここで学生を集めて運営していくのだということを示していくべきだと思っています。それに向けた関係づくりをどうしていくべきいいのかが課題です。

【部会長職務代理者】ネットワーク多摩は関係団体8市から構成されていますので、参考になるような気がします。東海大学からすれば、秦野市は関係し

ている自治体の一つです。八王子市は21大学を抱えていますので、単独で学園都市ブランドの強化を推進しています。それに対して、ネットワーク多摩は関係8市に21大学を有しており、自治体同士と大学とが連携しているという違いがあるようです。

【事務局】八王子市も大学を抱えていますが、拠点の都市としては難しい状況だと思います。八王子駅が学生の街といった雰囲気ではない印象がありますし、まちづくりを進めるにしても核が分散しているように思います。

【部会長職務代理者】帝京大学も3つの市にまたがっているのですが、敷地のほとんどは多摩市に位置します。当時の本部が八王子市にあったために八王子市の住所になっていますが、事実上は多摩市です。

【企画課】ここで、秦野市総合計画について御紹介いたします。

—総合計画抜粋を読み上げ—

【事務局】秦野市の総合計画については、平成28年度から32年度までの計画となっています。大学連携についてはお手元の資料に記載のとおりですが、当調査会としては、各課がばらばらにやってしまっているという状況を踏まえ、戦略性を持った取組みとして実施していただきたいという趣旨があります。当部会では、本年度の議論を通じて、大学側の意見も聴きつつ戦略性を持った取組みをお願いいたします。

【部会長職務代理者】基本は総合計画になりますので、その内容を入れておいたがほうがよいかとの考え方から質問しました。他に何かご質問等ありますか。

【委員】大学連携については総合計画の中で方針が示されているとありますが、総合計画の内容では弱いのではないかということだと思います。さらに発展的に取り組む必要があるといった意見を書かなくてよいのでしょうか。テーマの選択について、総合計画からはあまりピンと来ませんでした。

【事務局】大学連携の取組み自体は、総合計画に書いてあることが基本となります。ただ、取組み自体に少しばらけたところがありますので、戦略性を持たせていくという意味も込めて、そのようなニュアンスを入れるとよいでしょうか。

【委員】そうしてテーマにしている、という書き方にしたほうがいいと思います。

【部会長職務代理者】私が調べた多摩市も同じ環境です。市内に大学があるわけではなく、秦野市、伊勢原市、平塚市のように、8つの自治体と連携しています。こうした環境にある多摩市の総合計画の書き方が、先程紹介したものです。多摩市の場合は、大学や企業等と連携したまちづくりを推進し、大学や企業の知識や人的資源を生かしたまちづくりを推進していくという程度の書き方でした。秦野市がそれに劣るものではなく、消極的とも感じられません。

【事務局】総合計画自体はそうですが、内容的にはネットワーク多摩のほうが一步も二歩も進んでいます。

【部会長職務代理者】多摩市そのものが表に出るのではなく、8つの自治体で連携しているネットワーク多摩という組織に大学との連携業務を事実上任せているということです。秦野市、伊勢原市、平塚市、大磯町でネットワーク財団をつくり、東海大学だけではなく、近隣の大学との連携事業を運営していくのが多摩のスタイルです。

【事務局】神奈川県としても、同様の仕掛けを考えているように感じます。先日、関係市である秦野市、伊勢原市、平塚市、大磯町と東海大学とを集めた広域連携会議が開催されました。具体的に連絡会を設けるような話ではなかったようですが、第一歩として地域連携や大学との関係性を見据えているように思いました。

【部会長職務代理者】秦野市総合計画が別に見劣りしているわけではなく、書き方の問題かもしれません。

それでは、次に進みます。4ページはこれまでの歩みですが、いかがでしょうか。

【事務局】5ページの現状分析については、東海大学があることでの経済効果に触れておいたほうがよいのではないかと考え、最後に付け加えたものです。御意見があればいただきたいと思います。

【部会長職務代理者】この試算について、神奈川県統計センターが公開している産業連関表が活用できるのではないかでしょうか。パソコンでの試算が可能です。ただ、大学の場合は特殊ですので、統計センターから電話でアドバイスをもらいながら金額について調べて見ると、より正確な数字が出るよう思います。それほどの手間ではないと思います。

【事務局】東海大学があることによる経済効果というよりも、東海大学生のうち秦野市内に住む学生の経済効果を出しています。そのため、試算に当たっては難しい部分もあるように思います。自宅通学生が大根地区でどの程度経済効果を生んでいるのかとなると、難しいところです。

【委員】大学もその辺りは詳しく把握していないとのお話をでした。秦野市としても、住民票を移していないことには把握は難しいと思います。ここにある6千人という数字はどこから出てきたのですか。

【企画課】住民票からではなく、大学側から大まかな人数としてお聞きしたものです。

【事務局】平塚市真田地区にも多くの学生が居住していると思います。

【委員】これまでの歩みについては、過去の検証とまでいかなくとも、全てが今まで続いているのですか。

【企画課】協定書や申合せは継続しています。

【委員】 それらがもたらす効果までは分からぬのでしょうか。現状分析のところでいきなり経済効果の話になってしまふので、もったいなく思います。

【事務局】 現状分析は別の項目にしたほうがよいかもしません。これまでの歩みは事実の経過であり、現状分析は部会としてのものですから、項目も含めて考えてみます。

【部会長職務代理者】 施行年月日の記載があるところは、本文の後に括弧書きが入っています。事実関係のところは、本文がないから項目のあとに括弧が入っていますので、項目の後につなげるよう統一してはどうでしょうか。

【事務局】 そのように対応します。

【部会長職務代理者】 次に、「VI 課題及び必要とされる視点」についてです。先程の説明では、私達が必要ではないかと考えたことをまとめたものですね。

【事務局】 報告書として肝心なことだと思いますが、課題と視点として、これまでの議論の中で出てきた問題点等をまとめたものです。

— 詳細について読み上げ —

議論の中から抽出してみました。戦略性を持たせるという意味でも、課題や視点の整理が必要だろうということで、項目として入れました。大事なところですので、視点や書き方について御意見があればぜひいただきたいと思います。

【委員】 2の(3)はどういうことでしょうか。市から見て、大学に対してということですか。

【事務局】 秦野市としてはそれなりにメリットを感じて、提携事業をいろいろとやっているわけですが、逆に大学側が秦野市との提携事業に期待する取組みは何か、また、今後新たなニーズについてしっかりと把握して取り組んでいく必要があるといった趣旨で書いたものです。言葉足らずな表現かもしれません。あるいは、(4)と内容が重複しているような気がします。

【委員】 確かに(3)と(4)は視点という立場で項目立てると、重複しているように思えます。特に(3)がピンと来ませんでした。

【事務局】 (3)と(4)はひとまとめにして、整理したいと思います。提携相手のニーズあるいは考え方、連携といいますか、お互いどういうところを求めているのかについてマッチングしないことには、新しいものが生まれにくいくらい思っています。その辺りのマッチングが必要なのだと言いたい部分ですので、内容について改めて整理したいと思います。

【委員】 一言で言うと、相手の立場に立って考えようということです。

【事務局】 あまり市の都合ばかり押し付けないように、ということになります。

【部会長職務代理者】 「期待する取組み及びニーズ」という表現も、意味が重なっているように感じられます。

【事務局】 修正します。

【委員】地域への経済効果はとても重要ですが、他に何かきちんとした視点や指標といったものはないのでしょうか。具体的にこれを評価しようとしたときに、1(1)では「現行の事業に対する評価や効果の検証が曖昧」と言っています。それでは、今度はどうするのかというと2(6)では「地域への経済効果」となっています。検証できるような指標なり視点なりがないと、先程の6千人×10万円という試算があまりに漠然として信頼性に欠けてしまいます。また、地域を説得する材料にはあまりならないと思います。例えばこんな指標を使うと、大学の経済効果はこの程度で、今後施策を深めることでそれが2割増しなり3割増しなりになるといった経済効果が期待できる、というような形になるとよいのではないのでしょうか。

【事務局】課題のほうで検証が曖昧だとしていますから、2の視点ではそれに相対するものとして評価や検証できる視点が必要という内容を入れたいと思います。大学との連携には経済効果もあると思うのですが、メインはひとつくりだと思います。あるいは、大学の資産の活用、人としての知的資産の活用とも言えます。数値化は難しい部分ですが、大学の知的資産を活用することによって、生涯学習等を通じ市民の暮らしが豊かになります。あるいは、学生が秦野市のまちづくりに関わることで、今後秦野市に住もう、秦野市と関わりを持とうと思ってもらうような将来への投資的な部分もあるかと思います。1、2年での評価検証は難しい部分もありますが、一方でしっかりと評価検証も必要かと思いますので、そういったところも視点の中に入れ込んだほうがよいと思います。2(6)地域への経済効果の部分に、文言を入れるような形にしたいと思います。

【委員】地域連携の一環で、東海大学の海洋調査研修船「望星丸」による青少年洋上体験研修があります。秦野市や近隣市町村の中学生を対象としたものですが、秦野市からの参加者も多く、非常に講評で人気が高い事業です。そういう事業であれば、効果やメリットはなんとなく見えますが、他は実施しているもののつじつま合わせのように人集めを一生懸命やっているようなところがあるのではないかという印象があります。まずはきちんと指標を設定するべきです。指標というとすぐに人数を連想しがちで、人が集まればそれでよかったのかということになりかねません。本来はそうではなく、機会があれば再度参加したいという気持ちが起きないといけません。そういうところが出せるといいのかなと思います。

【事務局】行政にはそういう指標の捉え方が非常に難しい部分がありますが、今の時代にはそういうものがないと市民の納得が得られないという側面もあります。その辺りを常に意識するようにという意味で、2の視点のところに入れたいと思います。

【部会長職務代理者】「2 大学との提携事業に関わる施策の最適化に必要とさ

れる視点」とありますが、最適化に必要とされるのではなく、最適化を検証する際に必要とされる視点という意味ではないでしょうか。地域への経済効果そのものを計ろうとしているわけではありません。評価する際に、あるいは、最適化を目指す際に必要とされる視点ということだと思います。

【事務局】そのとおりです。各課でばらばらにやっている施策について、戦略性を持って一つの流れにしていきたいと考えており、それをいわゆる最適化と呼んでいます。そうした中で、最適化を進めるために求められる視点というようなイメージです。

【部会長職務代理者】経済効果を入れてしまうと、ニュアンスが伝わりにくくなるかもしれません。経済効果は何らかの形であるはずで、だからこそ大学とは連携を密にすることです。施策を展開することによって、経済効果を拡大しようという話ではないと思います。そこを誤解されないようにしていただきたいと思います。

【委員】現状分析を項目分けしても、学生1人が1ヶ月10万円を消費することが経済効果だと記載があれば、誤解を生むかもしれません。

【事務局】ほぼ住居代かと思われます。10万円のうち3、4割くらいはアパート代というイメージではないでしょうか。

【委員】地域の住民からすれば、アパート代と飲食代が重要なわけです。

【行政経営課長】学生の消費行動と書いていますので、学生が地域で消費するときの経済効果だと思います。それ以外にも、大学関係職員や著名な方がいれば、視点を変えれば年収に応じて高額納税につながるという効果もあります。有名なスポーツ選手はかなり営業収入が多いですから、それだけでもかなり高額納税していただけるというメリットがあります。ここではあくまでも学生の消費行動に限定した表現です。

【委員】実体としてはネットや通信販売、コンビニエンスストアを利用していますので、学生に限定してしまうと売上げが秦野市外に流出していることになります。一方、市外在住の学生が地域で飲食していますので、ふわっとした表現が適しているかもしれません。

【委員】大学があることによる部分もありますが、大学が地域で活動することによっていろいろな経済効果を生むという視点が必要ではないでしょうか。大学側からではなく市側から見ると、何らかのお金を生み出してくれなくてはあまり効果がないような気がします。

また、大学が目的とするのは学生に対する教育であり、地域住民の教育は目的ではなく付随的なことになります。大学としてはそうですが、地域からすると新しい事業が起こるとか、観光事業によって観光客が増えて収入が増えるだといったことを期待します。それがなくては地域としては困るわけです。まして東海大学は平塚市に位置しますので、税収面以外で何かしらのお金を生み出

せなくてはいけないと思います。

【委員】仮に経済効果が72億円ではなく30億円であったとしても、そこに知的資産があるのだから、秦野市としてはそれを少しでも活用しようという立ち位置だと思います。

【事務局】そもそも大学や高校は企業誘致とは異なり、それほどお金にはなりません。学校法人自体が非課税ですので、秦野市内に立地していたとしても固定資産税が入らないのは現状と同じです。税収には結び付かない、あるいは、居住する学生が出すゴミ収集や生活道路を補修しなくてはならない、しかも学生は住民登録しておらず住民税も入らない、などとデメリットは挙げればたくさんあります。そこで発想を転換して、お金を生まない部分についても、できるだけ人を活用してメリットに変えていこうというところも課題としてあります。消費行動なり経済活動という要素は常に頭に置くべき部分ですが、そもそも現状では学生をお金に結び付けることが直接的には難しいかと思っています。それよりも、むしろデメリットをメリットに変えていく工夫が出来るのではないかと考えてみてもよいのではないかと思います。今年度テーマとするに当たり、我々事務局としては以上のようなことを視点として持っていました。

【部会長職務代理者】だからこそ、上智大学短期大学部の学生には英会話などで知的なものを還元してもらおうということですね。

【事務局】上智大学短期大学部の学生は、送迎バスで駅と大学とを往復するだけで、下宿生も少ないと思います。市内に学生が歩いている姿はほとんど見受けられません。市内小学校で、子どもたちに英語を教えてもらう事業を通じて連携しています。短期大学の場合は在学期間が短いので、個別に、あるいは先生を通して密着した付き合いをするには難しいところがあります。どうしても、知的な部分で実績を残していく形になってしまいます。

【部会長職務代理者】学生は就労していませんから、住民税の納付はありません。そういう面では、大学が立地するメリットがあまりないように思えますが、少なくともアパートの大家さんには家賃収入が確実に入っているわけです。また、学生の消費行動により、地元の商店街や不動産業にとってはかなり大きな経済効果を生み出していると思います。大学がなければ、そもそも72億円という試算上の経済効果はないわけです。そういうことで言えば、税金を払う払わないということよりも、経済的に大きな消費活動をしてくれていると理解しています。

【委員】私の印象としては、市内4駅にある商店街のうち、東海大学駅前商店街が一番活発だと思います。理由として考えられるのは、おそらく若者が多いからです。以前は渋沢駅周辺に近隣企業の社員が多く通勤されており、新興住宅が建設されたり飲食店ができたりと大変賑わっていました。ところが、

大手企業が撤退した途端にさびれてしまいました。東海大学前駅周辺が継続的に活性化しているのはなぜかというと、人がいることに加えて、やはり若者がいることが大きいのではないかと思います。数字や金額的なことより、市民の意識があることで世の中が活発化するモデルケースのような気がします。逆に商店街目線で考えると、人がいることでこんなことができますよと示しています。東海大学駅前商店街の売り上げが数字的に上がっているわけではないかもしれません、手を変え品を変えていろいろやろうする機運につながっていると思います。正直印象でのお話なのでなんとも言えませんが、20年30年前からずっと同じ商店が営んでいる商店街に比べると、商店街自体が変わっていこうとしているまちづくりをしていると思います。それを経済効果として捉えるのであれば、人の流動性があるのは市内で唯一東海大学前駅だと思います。それがなぜかというと、大学があるからであり、しかもその大学が2万人を抱えるマンモス校であることは、地域にとって財産だと思います。

【委員】利便性も関係してくると思います。東海大学の上の方に住む方は、東海大学がなくなれば近隣店舗もなくなってしまいます。東海大学生がいて、商店街が残っているから、周辺に住む住民も買い物が出来ています。経済効果としては計算できませんが、結果として利便性を上げているわけです。

【委員】それを経済効果と捉えるには難しいところがありますね。

【部会長職務代理者】効果というより、消費しているのは事実です。大きさは分かりませんが、確実に消費しているのは間違ひありません。地元住民もアパート経営や、儲かりはしないでしょうが商店街でお店を営むといったように、少なくとも生業として反映されています。そういう事実を認識することがスタート地点だと思います。住民登録がなく納税していないから駄目ということではなく、そういうつながりがあるのだから連携を強化していく姿勢が必要だと思います。大学や学生が何を望んでいるのかを体系立てて、地元自治体として、自治体同士でも連携していくような大きなストーリーだと思います。

【事務局】学生そのものが消費の対象というよりは、学生がまちを活性化することで、市外からの消費も含めた経済効果をもたらしてくれるという部分では大事だと思います。つまり、学生にお金を落としてもらうというよりは、学生にまちを活性化してもらい、市外から人を呼び込むという視点が大事だと思いました。経済効果はそれとして別枠で現状分析の中で触っていますので、ここではそういった視点で論じたいと思います。

【行政経営課長】東海大学駅前商店街には、昔からあって今もなお残っている店が多いようです。店が潰れずに経済活動ができているというのは、常に学生の往来があり、そこに必要なお店があって、市民も集まつてくるという流

れなのだと思います。

【委員】 それぞれの地域について、例えば東海大学前の地域のGDPが他の地域の生産性に比べて高いということは分かるのでしょうか。

【事務局】 決して高くはないと思います。大屋委員がおっしゃったように、東海大学通りでは店舗の入れ替わりが激しい状況です。夏休みや正月には人通りもまばらになりますので、商売を続けるのがそれなりに難しい地域です。若い力を生かしてイベントなど様々な仕掛けをしている商店街ですが、商店街として豊かなのかというとそうとも言えません。

【委員】 年間で8ヶ月しか商売が出来ないまちとも言えます。

【委員】 それでは大学の効果が逆効果になっているように感じます。

【事務局】 学生を消費の直接対象として見るには、商売としては難しいかもしれません。

【委員】 もう少し地域経済に貢献してくれるものかと思いましたが、難しいようです。何か打つ手は無いのでしょうか。

【部会長職務代理者】 決してマイナスになっているわけではないのでしょうか、夏休み等は商いが成立せず、年間8ヶ月に限られてしまうわけです。大学周辺でコンビニエンスストアを出店する際には、そこがネックになってしまいます。

【委員】 大学が無ければ商店は存在しませんので、大学があることで確実に利便性は上がっています。ただ、東海大学周辺には平地が少なく、渋沢駅周辺に比べると住宅用地が少ないように見受けられます。商売として考えるとそれほどいい立地ではありませんが、大学があることで明らかに地域の利便性は上がっています。

【部会長職務代理者】 部会長がいらっしゃいましたので、議事進行を交代させていただきます。

一坂野部会長に議事進行を交代—

【部会長】 遅れてしまい申し訳ありません。それでは、7ページからの「V大学との連携に関する施策について」に進みます。具体的な提言についてまとめていただいたもので、最初に大学との連携全体についての方針が書かれています。続いて、東海大学と上智大学短期大学部のそれについて述べられています。

まず、大学との連携に関する施策についてです。後述の部分と関わるものもありますので、御意見が出にくいようであれば東海大学の項目まで進めてから戻るということにいたします。9ページ目までのところで、いかがでしょうか。

【委員】 7ページ目の下から6行目「これまで先進的に幼児教育に取り組んできた歴史」とありますが、具体的にはどういうことでしょうか。

【事務局】 秦野市の特徴として、公立幼稚園が多いことが挙げられます。神奈

川県内では公立幼稚園が昔から少ないので、秦野市では地区ごとに幼稚園が置かれていることで、公立の幼児教育が非常に進んでいました。また、保育園と幼稚園の施設を一体化させたこども園の取組みが全国的に進んでいますが、秦野市ではこれに先進的に取り組んでいます。

【委員】素晴らしいことですね。

【委員】今日歩いてくるときに、本町幼稚園が大正時代の設立されたのはすごいことだと思いました。

【事務局】通園費用は高くなりますが、バス通園で便利なこともあってか、都心部では私立幼稚園がほとんどです。

【委員】いまお話のあった段落2行目に「豊かな地域資源があり、加えて大学との連携事業を充実させることで」とあります。加えて以下の部分は、これから取り組むことを意味するのか、これまでやってきたことを指しているのか、読んでいて分かりづらく感じました。

【事務局】これからという意味になります。秦野名水について盛り込んだために分かりづらいのかもしれません、名水は昨年のテーマですので入れたかったところです。これまで先進的に幼児教育に取り組んできた歴史があり、さらに加えて大学との連携事業をより一層充実させることで、幼児期から大学・社会人に至るまでの充実した環境が整備されるというような趣旨になります。

【委員】秦野名水については削除してよいかと思います。地域資源ということであれば、大学と関連した他の資源を盛り込んではどうでしょうか。

【事務局】ニュアンスとしては、秦野名水も地域資源ですが、大学も地域資源だということを入れたいと考えていました。文章を整えて、整理させていただきたいと思います。

【部会長】この豊かな地域資源をまだ十分生かしきれていないので、さらに大学との連携をすることで地域資源の潜在的な力を引き出す可能性がまだまだあるということにしてはどうでしょうか。

【委員】そういうことであれば、理解できます。いまおっしゃられたように、文章を区切ったほうがよいかもしれません。一文で続けると、意味が分かりにくくなると思います。他にも、8ページの第2段落にある「こうした地域特性の活用及び課題解決への足掛かりとして」というところが、何が言いたいのかなと意味が入ってきました。

【事務局】ここも前後と合うように、文脈を考えてみたいと思います。

【委員】あと、「(2)秦野市の強みを活かした戦略的なアプローチ」のところに、2行目で「秦野市の強みともなりうる」とあります。大学とのいろいろな研究フィールドやテーマを考えるのであれば、強みだけではなく、強みと弱みの両面をきちんと評価すべきではないでしょうか。大学から見たら秦野市

は強みだけ取り出しているのかと感じますし、弱みをさらに強みに変えていくのも研究テーマの一つになるのではないかと思いました。強みと弱みという観点のほうがよいのではないかと思いました。

【事務局】強みや弱みというよりも、特長なのだと思います。ものの見方によっては、弱みが強みに変わったり、例えば自然が豊かなのも強みであったり見方によっては弱みにもなったりもします。お話を聞いていて、強みや弱みというよりは特長を活かした部分としたほうがいいのかなと思いました。弱みも生かして強みに変えてもらったりというように、活用の仕方で強みになったり弱みになったり変わってきますので、特長といった別の言い方に変えてはどうかと思いました。検討させていただきます。

【委員】3の見出しについて、「秦野市がテーマとする」の部分は必要でしょうか。これがあることで、何が目的語か分からなくなってしまいます。無くても意味はつながると思います。

【委員】本来の意味としては、秦野市がテーマとするのではなく、大学がテーマとするのだと思います。

【委員】正確に言えば、「大学がテーマとする研究フィールドを秦野市が提供し」ということです。この項目名はシンプルにしてよいと思います。

【部会長】この段階であまり大きな変更はしたくないのですが、先週報告書(案)をいただいて、読んでいて感じたことがあります。東海大学側のニーズとして、一つには、新しい教育モデルとしてパブリック・アチーブメント(PA)型教育を掲げており、地域課題を解決するとして、この地区では3つくらいテーマを設けて自治体と共同連携していくとしています。もう一つは、学生をそうしたカリキュラムに巻き込んで、地域の中で教育していくとしています。そうすると、そうした大学のニーズがあるから、その目的達成のために市が出来る限り研究フィールドであるとか教育カリキュラムに対する支援を積極的に行うということが一つの方針になるかと思います。これは大学側から見た秦野市に対するニーズなのだと思います。もう一方で、報告書(案)を読み進んでいくと、結局市側のニーズが見えてきます。市側のニーズは、大きくは「まちづくり」と「ひとづくり」の2つに分けられます。その「まちづくり」の中には秦野市のプランとして安全安心などいくつかあると思いますが、それらを達成するために今度は大学の持つ資源や人材に参画してもらいうことです。市側が抱えている「まちづくり」「ひとづくり」というテーマに対して、大学側に研究してもらう、あるいは、学生に来てもらって手伝ってもらうような相互関係があり、全面的に取り組んでいくということにするのです。すると、それぞれのテーマを達成するときに、秦野市にはこういう強みがあるから研究フィールドとして意味があると大学側に訴えていくのはいいアプローチだと思います。研究テーマが来る前に、大きな枠とし

ては結局まちづくり、ひとづくりといったことになります。ただ、それではつまらないでの、例えば「ひとづくり」で言えば、従来市が実施してきた「ひとづくり」にはおそらく子ども時代と生涯教育という対象があったかと思います。大学の持つ潜在力を考えると、生涯教育レベルについては、大学があることで従来なかったような高度で多様な学習ニーズに対応できる生涯教育の仕組み、ひとづくりを構築できると思います。あるいは、「まちづくり」に関連して言えば、課題解決型の市民を育成することも考えられます。子どもに関して東海大学のお話で私が一番感じていることは、本物に触れられるということです。感受性の高い子ども時代に本物に触れる機会が得られるというのはとても貴重なことで、おそらく学校内では経験できないと思います。東海大学にある資源によって、子ども時代に本物に触れて感激する機会があり、結果として感受性の豊かな子どもを育てるといったように、「まちづくり」「ひとづくり」ごとにそういったテーマがあるのだと思います。それを具体的に実現するには何が必要かというと、9ページにある4や5のような話が出てきます。連携にはコーディネーション機能が足りないのではないか、あるいは、今まで連携できていない部分もあるからそこをどうにかしようといった意見の展開になるかと思います。また、前に戻りますが、大学と地域の連携は秦野市単独ではなく、広域で地域連携課題といったものを一緒に解決していくばともっと違う連携の仕方ができるのではないかということもあります。7ページの1、2については、そのような書き方でもよいかと思いました。本当は目標として、どういう市民を育てるか、どういうまちづくりを進めるのかということがあり、そのために大学の資源が活用できるのではないかといったストーリーが見えたならよいのではないかでしょうか。

【事務局】本日の会議では御意見をいただきて、次回会議でより豊かな報告書（案）を御提案したいと思います。

【部会長】多様で高度な教育機会はあるのでしょうか、実際はそうしたニーズを小田急沿線上にあるカルチャーセンター等が反映している部分もあります。そういったものを利用しつつ、それ以外にはどういうことができるのかというと、後述のとおり、学習のコーディネータープログラムを作ることで、講座として成立しないものでもスモールスケールでマッチングできるような気がします。そういうところにどんどんつながっていくと思うので、どういう教育をしたいか、どういう人を育てたいかといったところを前面に打ち出したほうがいいように思います。上智大学短期大学部を考えると、外国語教育に一生懸命関わってくれていて、月並みな言い方ですがグローバルな人材を育てるにつながっています。市としてはあまりPRされていないようですが、事実確認した上で、秦野に住むと大学生から少人数に近いような形で語学教育をしっかり受けられますと広く周知することが、かなり大きなアピ

ールポイントになると思います。日本の現状からすると、小中学生が大学生と直接接する機会は少ないように思います。それが秦野市で小中学校時代に生活すると実はそういう機会に恵まれるというのは、その人の一生を左右するような出会いになるかもしれません。

【委員】東海大学には意外と留学生が多く、また、外国から来た先生方もいます。いまお話にあったような複合的な教育も可能だと思います。

【事務局】先日、田村委員がクロスクエアで留学生の出身国にまつわる講座が開催されていたことについてお話されていましたね。

【委員】あれは面白い講座でした。ストーリー立てて、体系立ててできるといいですね。

【部会長】フィールドを選定するという話は、このまま生きると思います。大学側のニーズと市側のニーズがあり、大学側のニーズに対して市側は何が提供でき、市側のニーズに対して大学側が何を提供でき、それが実はバラバラではなく同じ場所で解決できるということがいいのだと思います。それが同じ研究フィールドであったり、同じ学習の場であったりということになるのかと思います。うまく書くのは難しいかもしれません。

【委員】東海大学と上智大学短期大学はカウンターパートで、それぞれに特徴を持っています。片やマンモス校の総合大学、片や単科の短期大学という、特色ある2校が近接しているのが秦野の特色と言えます。そのあたりをうまく言葉で表現できると面白いと思います。東海大学は日本一大規模大学で、いろいろと部活や課外活動に取り組んでおり、田村委員がおっしゃったように留学生が多い大学ですので、やりようはいくらでもありますし、間口も広いと思います。それを市側としても理解した上で、テーマを投げ掛ける先がいくらでもあるということが、最初にバンと書いてあってもよさそうです。

【事務局】分かりました。

【部会長】だいたいよろしいでしょうか。

【委員】いま大屋委員がおっしゃったように、各大学のところではなく総論の部分をもう少し小さくしたほうがいいのかなと感じました。これは東海大学を意識した記述なのかなと感じる部分もありますので、このあと議論する各大学の項目に落とし込んでいったほうがよいのではないかでしょうか。

【事務局】部会長や大屋委員がおっしゃったように、ちょっととしたストーリー立てに留めて、あとは各大学の項目へ振ったほうがよいですね。

【部会長】それでは、これまでの御意見を踏まえてストーリー付けしながら、コンパクトにする方向でまとめていきたいと思います。

次に、各大学に関する項目についてです。上智大学短期大学部については、実際に視察できていませんので議論しにくい部分もあるかと思います。

まず東海大学について、何か御意見はございますか。11ページの主な提携

事業のところで、図書館相互利用や青少年洋上体験研修とありますが、もう少し数字的なことが入っているとイメージしやすいように思います。図書館の相互利用では、確か200人か300人といった会員数とのことでした。青少年洋上体験研修のほうは、人数もありますが、歴史的に何年間継続していて、述べ人数でこのくらいの参加者を出しているといったようなイメージではどうでしょうか。

【事務局】分かりました。

【委員】12ページの部会意見のところですが、本文の上から4行目に3つの柱というのがあります。このうち、健康バス事業だけが3つの柱のひとつとするには話が小さいような気がしました。

【委員】東海大学がこの3つで近隣市と取り組むと掲げていました。柱とはせず、3事業とすればよいのではないかでしょうか。

【委員】事業としてもっと大きいものがあって、その中のひとつが健康バス事業ではなかつたでしょうか。

【事務局】東海大学側からの資料によると、広域安心安全事業、広域型健康バス事業、広域型観光ブランド開発事業とあります。

【委員】その下のレベルに位置するのではないかと思いました。

【事務局】次回会議までに東海大学から報告書案についての意見を伺う方向ですので、その際確認します。

【部会長】1はどちらかというと、東海大学が考へている地域連携のあり方に對して市としてはそれを活用していく、できるだけサポートしていくというスタンスで、市としてもいろいろなメリットが得られるのでサポートしていくましょうという内容です。2、3は、それとは違う市側のニーズから出てきている事業の展開の仕方についてです。2の中には先程お話したまちづくり的なものとひとづくり的なものとがいろいろ入っています。中でも、具体的なイメージがあるのが最後にあるC C R Cの話です。

【事務局】順番や項目も含めて、シャッフルしてもう一度考えてみたいと思います。先程ストーリー付けというお話もありましたが、1から3まで少し混在した部分もありますので、アプローチについて整理したほうがよいかと思います。

【部会長】3はまた少し内容が異なり、それこそ大学生に愛着を持ってもらつて関係性を作り出そうという提案になっています。

【委員】12ページの一つ目の項目の見出しについて、秦野市単独ではないというニュアンスとしてどこかに「関係自治体と協力の下」といった文言を付け加えてはどうでしょうか。広域連携会議は関係自治体と大学とのプラットフォームという位置づけで既に動いていますので、そのような言い回しがよいのではないかでしょうか。また、先程幼稚園の歴史についてお話がありまし

たので、東海大学に教育学部があれば、幼児教育とつなげるというような取組みができるのではないかと思いました。せっかく公立幼稚園があるのでから、幼稚園教諭を目指すのであれば自治体職員も視野に入れてもらいたいですね。

【事務局】東海大学では小学校以上の教員免許取得は取得できますが、幼稚園教諭免許の取得はできません。そのため、教育実習は小学校以上で実施されています。

【部会長】整理の仕方としては、1番目は先程前項でお話しましたが、東海大学がテーマとして掲げているものがありますので、それについては全面的に協力するとなります。2番目以降は、結局秦野がまちづくりひとづくりということを考えたときに、コラボレーションするフィールドとしてこういうものを考えていて、コラボレーションの仕方としては教育、研究としてこんなものが考えられ、そのときにコラボレーションには基本的には大学側が持っている資源と市側が持っている資源と、あとは市民が持っている資源とがどういう組み合わせが考えられるのか。それが書ければよいと思います。秦野市として、どこが一番これから伸ばせる可能性があるのか、あるいは、研究者側から見た魅力ある研究と教育のフィールドになるのかと考えたときに、ポテンシャルのあるフィールドとして、例えば幼稚園とか、あるいは鶴巻温泉があると考えていき、鶴巻地区ではこんなテーマで考えられるとしてC C R Cとか、短期大学では生徒さんたちの実習の場には使えないかもしれません、それこそ政策側やそういう研究をしている方たち、あるいは教育学の先生のフィールドとして使っていただくことは可能だと思います。全てを特定することは難しいと思いますが、正解でなくてもよいので、それぞれが持っている資源を合わせるとポテンシャルがありそうだと思えるようなことがフィールドごとに描けると思います。そこに里山が入ってくれれば、自然科学系の人たちも入るでしょうし、農学部の人も入るでしょうし、ツーリズムとして観光系の人も入ってくるでしょうし、そこに市民ボランティアの人たちも入ってくるかもしれません。自然観察を考えているグループもあります。要は、いろいろなフィールドがあって、それぞれのセクターが持っている資源があって、これを組み合わせると面白そうだということです。

【事務局】教育実習などでは難しいかもしれません、幼児教育が豊かということで言えば、東海大学に体育学部はありますので、運動機能の研究とか、あるいは芸術系の学部もありますので、そういった部分のコラボが可能です。それを選んでいくのは大学側であったり、企業側であったり、市側であったりすると思いますので、ある程度項目を出して、それぞれ例示するような形になりますが、イメージとしては例えば報告書の中で官・民・大学それぞれのメリットあたりを書いて、図式化しながら例示して、こういう具合で考え

るというようなアプローチで提案するのもいいかもしれません。

【委員】その際、水源林の涵養のところも入れておいてください。ちゃんとヤビツのところで水源の森づくり事業に取り組まれていますので、自然科学系の研究者にもぜひ来ていただきたいと思います。

【部会長】2のところはそういうことでよろしいでしょうか。3のところは、そういうことに学生が参加するようになれば、地域とのつながりが出ると思うのですが、学生が秦野市ともう少し関係性を持ってもらうようになるには何ができるのでしょうか。

【事務局】地域活動へ参加の道を開くという部分があれば、卒業後に秦野に住んでくれなくても秦野に居たのだと思ってもらえることにつながると思います。先日高校生とのワークショップの機会があり、筑波大学の先生とご一緒したのですが、自治体では若者施策、若者に参加の道を開く施策の優先順位が高いようだとおっしゃっていました。私としても、これからを担う若者たちが自分の将来を考えるために参加の道を開いていくのは地方自治体としても優先順位が高いものだと思いますし、人口構成上少ないはずの18歳から22歳までの若者が秦野に居るというのは逆にメリットにできるような気がします。そういうアプローチでもっとうまく書けるといいと思っていますので、ニュアンスとして入れていきたいと思います。

【部会長】ちょっとしたことありがたいと思ってくれるような気がします。私の研究室に初めて来た韓国人留学生が「今日は先生の日です」と言って、わざわざ親が贈り物を贈ってくれたことがありました。大きなつぼの中に蜂蜜が入っていました。驚いたのは先生の日があるということです。その前に訪れたパキスタンでは、卒業式の際に成績優秀者を表彰しますが、成績優秀者だけではなく親も一緒に表彰していました。よくここまで育てたという趣旨でした。いまの話で言うと、上智短大生が成人式のときに、子どもたちが語学を教えてくれたことに対して感謝の意を表するということも考えられます。学生も最初は行きたくないと嫌がるでしょうが、教え子達が感謝して何かプレゼントしてくれたら感激すると思います。そうした演出をするだけで、ずいぶん変わっていくような気がします。今は児童英語教育ボランティアとしてなんとなく授業をやって、そのまま終わってしまいます。それを、市あるいは市民としてよくぞ地域に協力してくれたと感謝することで、学生のモチベーションを上げられるような気がします。そういうことが積み重ねられるような気がします。

【事務局】私も子どもの頃、東海大学の水泳教室で学生に教えてもらう機会がありました。非常に印象に残っています。

【部会長】教えられる側は東海大学のオリンピックに関わっている人たちがきてくれたということでとても印象に残りますが、教える側は教えることが当

然と思っているかもしれません。小さな子どもに感謝されるような機会があるということは、他では経験できないこととして教える側もモチベーションが上がると思います。

【委員】メダリストによる水泳教室を開催すると、あっという間に定員満員になります。

【部会長】ニューヨークのハーレムでは、子どもの誕生を地域で祝うという感覚がありました。教会ですから誕生を祝うのは当然のことですが、家族のイベントではなく地域のイベントになっていたのがとても印象に残っています。そういう演出ができると、東海大学もいいことをしたという気持ちになってくれるよう思います。誰がやるかということもあります。既にいろんな教育の機会が作られていて、もう教えているのだから、その機会を地域としてちゃんと認め合って、それが教えてくれた人に伝わるような仕組みを作っていくものもあるかと思います。

【委員】12月2日に開催される市民マラソン大会に絡んでいただくのもよいのではないでしょうか。市民イベントに東海大学生も参加してもらうとともに、逆の方向もあって、秋の大学祭に市民が遊びにいけるよう広報を出してみるとといったことも考えられます。一度行けばもう一度行ってみようとなりますので、大学のイベント、市民イベントの相互交流について広域連携会議を通じて考えていけるとよいですね。

【事務局】秦野たばこ祭に一部協力してもらうことはありますが、そこまで交流が深まっていないように感じます。東海大学の大学祭は毎年11月に開催されていますが、同日に秦野市では市民の日というイベントを別に行ってています。確かに関わりが浅いように感じますので、意見として入れていけたらと思います。ただ、なかなか競技性の高いものについては難しいと思います。例えば、市民マラソン大会に陸上部の協力をお願いするには、大学側としてもいろいろと調整があるかと思います。

【委員】サークル単位での参加のほうが現実的かもしれません。

【部会長】それでは、ここまで出た意見をまとめていただければと思います。

【事務局】東海大学に関しては、本日の会議を踏まえた内容に修正した報告書（案）について、次回会議までに地域連携センターの方と意見交換させていただき、次回の会議で御報告させていただこうと思っています。

【部会長】続いて、上智大学短期大学部について何かございますか。

【委員】子どもたちとの事業を中心に、堅実な連携をしているように思います。

【部会長】主な提携事業のところですが、どのくらいの子どもたちが過去こういう連携によって恩恵を被ったかについて数字的なことが書いてあるとよいと思います。あまり知られていないことだと思いますので、そんなにたくさんの方々が実は恩恵を受けていたと周知すること自体が重要だと思います。

【委員】上智大学短期大学部は、地域に対する大きな方針を掲げているのでしょうか。

【企画課】大学としても地域に出て行きたいという思いはあるようですが、学生をある程度訓練してから出すという方針があるようです。どこにでも学生を出すというよりは、しっかりと授業なりカリキュラムなりで育成した学生を現場に派遣して英語教育に取り組んでいると聞いています。

【委員】育成した上でとなると、2年間ではあつという間です。

【部会長】小中学校の先生方からは、現場での評判はいいのでしょうか。

【企画課】市内各小学校で定期的に英語教育のサポート役をお願いしていますが、大変好評と聞いています。

【部会長】完全なボランティアですか。謝礼は出ているのでしょうか。

【企画課】謝礼は交通費程度となっています。

【部会長】補助金を付けるとなると大変ですが、クオリティが変わらないのであれば市側からすると助かりますね。大学側としては教育実習や授業の一環になっているわけで、ボランティアであっても交通費支給があればありがたいことだと思います。双方の利害が一致して効果が上がるのであれば、素晴らしいことです。上智大学短期大学部の学生が関わりうる語学教育の対象としては、小学校、中学校、あるいは幼稚も含まれるのでしょうか。

【企画課】児童向けには、市立図書館で英語による絵本の読み聞かせを実施しています。その他、小中学生を対象としては資料に記載の内容が主なものです。

【部会長】児童英語教育ボランティアに、東海大学の留学生が関わるのは難しいのでしょうか。小学校の教室で上智大学短期大学部の学生と同じような役割を担うことができれば、コラボしてもっと面白い授業が出来るのではないかと思いました。東海大の留学生だけでは難しくても、上智の学生が一緒であれば新しい授業の可能性が見えてくるのではないかでしょうか。

【事務局】英語の授業にネイティブの留学生と上智の学生とを組み合わせると、面白い授業への可能性が広がります。

【部会長】プログラムを組む方向性を考えてみると、対象を変えるとか教育の機会を変えるといったことは難しいように思います。そこで、同じ場所で違う人たちとコラボできれば、新しい展開の可能性が考えられるのではないかと思いました。上智大学短期大学部と地域との絆はどうなのでしょうか。

【事務局】駅からは通学バスを利用しておらず、主には学校と自宅との往復ですから、地域とのつながりとしては弱い部分があるかと思います。観光課では、観光協会のPR活動のお手伝いをお願いした際には、動きもいいし評判もよかったです。

【委員】上智大学短期大学部の学生は快く引き受けてくれる印象があります。

J Cでも何度かお願いしたことがあります、子どもを対象にした事業では7、8人の学生が子どもたちの面倒を見てくれました。先生を通じて直接お願いできることもあり、動きが早いように感じます。

【事務局】その辺りのメリットについても、少し書けたらいいかもしれません。

【部会長】先日行財政経営専門部会の会議に出席した際、教員のタブレットを使える率が低いというお話をありました。タブレットの使用について、大学生にティーチングしてもらうのはどうでしょうか。

【事務局】学習支援事業というものがありまして、教員にタブレットを配布して学習の補助を進めているものです。実情として、年配の教員の中には使い慣れておらず触れないという方も多くて、配ったはいいが十分に活用されていないようです。40代が少なく50代が多いという年齢構成の偏りがあるため、そういう状況があるのだと推測されます。

【部会長】東海大学や上智大学短期大学部の学生が手伝ってくれるかもしれません。学校教育のIT化促進のために大学生が全面的に支援してくれるということで、それこそ低コストで感謝の意を表し、結果として秦野市が日本一のIT化を実現したとなればよいかかもしれません。教員は忙しいので、使い方を習得する時間がないのだと思います。教室でも職員室でもよいので、大学生が先生に遣い方をパッと教えてくれるというのもよいかと思います。地方創生の戦略事業で抱えているネックについても、大学との協定で解消するとしてもよいのではないかでしょうか。内容もリンクします。

【委員】教員だけではなく、市民にもITに困っている方は結構いらっしゃいます。

【事務局】高齢者も両極端で、ITが好きな方はとても達者ですし、まったく触れないという方もいたりします。

【部会長】他にはよろしいでしょうか。

それでは、本日出た御意見を整理していただいて、東海大学のほうにも一度御提示いただいて、それを受けて我々のほうで議論するということになります。次回はこれで報告書の最終案と決めることいたします。

議事(2) その他

【事務局】一次回日程等説明—

第5回会議 12月17日(月) 15時から

【坂野部会長】次回会議では、今までの議論を踏まえた報告書の素案をまとめ、もう一度議論しながら必要に応じて修正することにいたします。最終的に第5回会議で成案できればと思います。

他に御意見等はありますか。

—意見等なし—

それでは本日は以上で終了いたします。ありがとうございました。

— 閉 会 —